

円本と人権

外 池 力

《論文要旨》

なぜ「戦争と人権抑圧を防げなかったのか」という問題意識のもとに、1930年前後のいわゆる円本時代の出版と人権の状況について論じた。出版については、円本の前にも、講座や全集のブームがあったことを踏まえつつ、当時の書店や個人の書架を占領した円本の「洪水」の原因と影響、特にその功罪について考える。また人権については、社会科学系の代表的な円本の執筆者や翻訳者の政治的弾圧の状況を調べ、犠牲者リストを作成するなどして、当時の政治的状況を考察した。その時代の人権状況を踏まえておくことが、出版などに焦点をあてた社会的な見方による政治的側面の軽視への歯止めになり、人権としての歴史を考察する基礎ともなる。最後に、治安維持法のメカニズムについて、デモクラシーと人権の関連を軸に、普選の導入というデモクラシーの拡大がかえって秩序への欲求となる一方で、社会運動側による既存の政治制度への批判が強まるにつれて、政治制度への不信が高まり、独裁が正当化されていくことになる。

キーワード：円本，日本の人権，戦前の出版，治安維持法，政治犯

はじめに

前回の論文では、なぜ「戦争と人権抑圧を防げなかったのか」という問題意識のもとに、1930年の出版と人権を取り上げた⁽¹⁾。ただ、そこではこの時代における社会科学系の出版の勢いや人権状況について十分に描くことができなかったのもので、本論ではそれを補うことにする。ここで問題とするのは、1930年ごろの体制批判的な出版の「活気」とその後の「沈黙」との対比で

ある。

図1に示すように、民主体制とその後の非民主体制において言論活動の活発さの落差が大きければ大きいほど、体制の移行の過程で、独裁の正当化が様々な形でなされているといえるので⁽²⁾、それらを考察することにより、「なぜ戦争と人権抑圧を防げなかったのか」という疑問について、普遍的な教訓が導き出せるはずである。

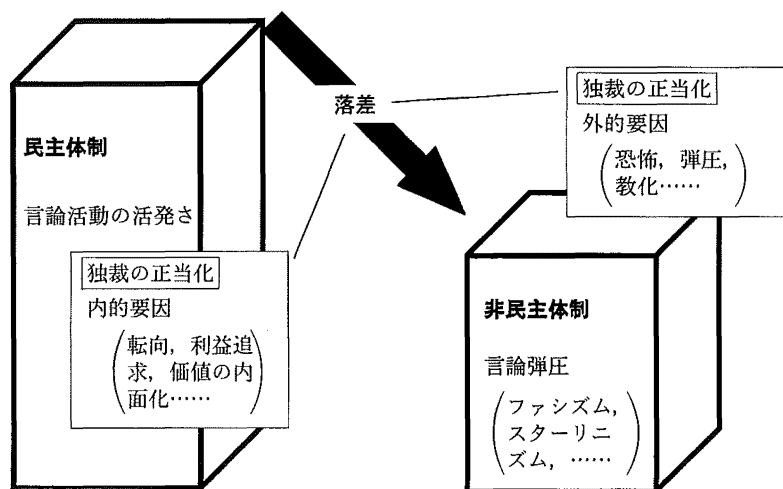


図1

たとえば、この落差が大きいドイツやロシアについて考察することにより、幅広く応用可能な教訓が引き出せる。ドイツでは、社会民主党と共産党がかなりの数の議席を占めていたにもかかわらず、あたかも自滅してしまったかのようなナチズムへの歴史の流れを再確認することによりこの落差を考察することができる。またロシアでは、ドストエフスキー、トルストイ、チェホフのヒューマニスティックな作品にも描かれた当時の裁判、刑罰、流刑地での政治犯を取り巻く状況と、革命後の冷酷な粛清裁判や収容所体制の落差を考察してもよい⁽³⁾。

戦前の日本を考察の対象にする場合は、この落差は、現在でも古本屋において数百円で手に入る円本を手にとることで簡単に実感できる。もちろん、現在でも古書市場で数多く流通しているそれらの書籍、図書館の蔵書、文献目録、さらにはネットでの検索結果が、当時の書店や個人の書架の活況を、そのまま伝えているとはいえないだろう。検閲や禁書により、発売直後に店頭からすぐに消え去った書籍や、また大量に売れ残り処分された書籍が再び市場に出回ったものも多かったため、それらが現在の古書店や図書館へいかに辿り着いたかについては、慎重に扱う必要がある。しかし、その一方で、この時代の書籍の質と量は、現在の私たちの想像をはるかに超えたレベルであり、それらが言論や思想を形作り、人々に影響を与えていたとみなされる。もちろん、前稿でも指摘したように、当時にはこんなものもあったという「発見」や「驚き」にはできるだけ禁欲的でないといけない。

この「落差」、すなわちその後の15年間の時代の激変と社会運動の挫折については、治安維持法の進化などによる弾圧の制度化、転向や思想善導を巧妙に図る政策⁽⁴⁾、未曾有の総力戦への突入による排他的ナショナリズムのエスカレーション、誤った方針によって不毛な内部対立を繰り返した反体制運動などによって説明することはできよう。それにもかかわらず、1930年前後の体制批判的な出版の強靱さは、当時の出版物をま・と・め・て眺めれば眺めるほど痛感させられ、なぜ「戦争と人権抑圧を防げなかったのか」という疑問が深まるばかりである。本論文では、先ほど示した「落差」の視点を前提として円本と人権について考察する。

1 全集、講座、そして円本の功罪

円本とは、1926年11月に刊行された改造社の『現代日本文学全集』を皮切りに、各出版社から出された、一冊一円の全集類の予約出版を指している。

それは、200種類以上が刊行され、多いものでは予約者は30万人に達するほどの一大ブームを巻き起こす一方で、過当競争や質の低下をもたらしたとされる⁽⁶⁾。円本の代表的なシリーズの一つである『経済学全集』の「予約規定」の一部を抜粋してみよう。

- 頒布方法 全四十七巻。予約者にのみ頒つ。
- 刊行期日 昭和三年十月より毎月一冊宛を刊行し、昭和七年八月を以て刊行完結す。(中略)
- 申込方法 先づ申込の際申込金として金壱円御送り下さい。之は最後の月の会費に計算しますから、最初の月の会費は別に御払込を願います。尚申込金は中途解約の方へは御払戻し致しません(前金一時払の方は申込金は要しません)
- 会費 (一) 毎月払(一冊に付) 壱円(毎月一日に御払込下さい)
(二) 一時払(全四十七巻)四十四円
- 送本料 会費の外に郵送料として一冊十八銭(東京市内六銭)づつを申受けます(海外送料三十四銭)(以下略)⁽⁶⁾

このような円本については、誰しも次のような疑問を抱く。

それらの全集は『キング』の場合のように、大衆層が気軽に楽しめる平易な内容のものではけっしてない。にもかかわらず、現代日本文学全集、世界文学全集、経済学全集、マルクス・エンゲルス全集、戯曲全集といった数十冊セットの予約出版物がなぜ数十万部ものベストセラーになりえたのであろうか⁽⁷⁾。

永嶺重敏は、円本ブームの直前に「プレ円本」現象があったことを指摘し

ている。そこでは『大杉栄全集』（大杉栄全集刊行会）のような全集ものと、大宅壮一編集の『社会問題講座』（新潮社）のような講座もののブームがあったとし、それらのブームの要因は、「震災後の〈書物飢餓〉」や「民衆の高等教育への要求」に加え、このようなシリーズものにおける広告費の経済性や原稿蒐集の効率性などの出版戦術があったとする⁽⁸⁾。

図2は、主な社会科学・思想系の全集や講座もの、そして円本のシリーズを示している。円本は、改造社の『現代日本文学全集』以降のものを指すが、すべてが一元であるわけではない。また有名な『日本資本主義発達講座』もそうであるが、講座ものには、著者の執筆の進行状況にも応じながら、雑誌のように幾つかの論文がまとめて送られてきて、企画の終了後、テーマ別に製本し直す形もとられており、発行された版の形態と図書館などに収められた版の形態が異なる場合もある⁽⁹⁾。このように『全集』が、「収録される多くの項目が一巻だけで完結しないで、数巻にわたって連載される」講座形式をとったものが多かった理由として、「シリーズ全体に読者をつなぎ止めておくための、安易な「商策」としての一面があった」とはいえ、「既刊のものを全集にまとめ上げる例が多かったなかで、書き下ろしの原稿を次々と月一回配本のきびしい制約の中で出版」を行っていたとされる⁽¹⁰⁾。前回の論文では戦前の出版界における活気ある年の代表として、1930年を取り上げたが、この図を見ると、この年は円本を中心としてまさに全集や講座物のピークの時代であったことがわかる。

たとえば1926年の出版動向については次のように示される。「本年の特殊現象として、大きく目立って来たのは、社会問題に関する講座の大きな反響を呼んだことである。『社会問題講座』（新潮社）⁽¹¹⁾、『社会経済体系』（日本評論社）がそれである。『社会問題講座』の如き、包括的な、通俗的な出版を要求する気運が読者階級に動じていたことは、既に昨年の後半期にも感ぜられたことであったが、この講座があればほどの大成功を勝ち得ようとは寧ろ

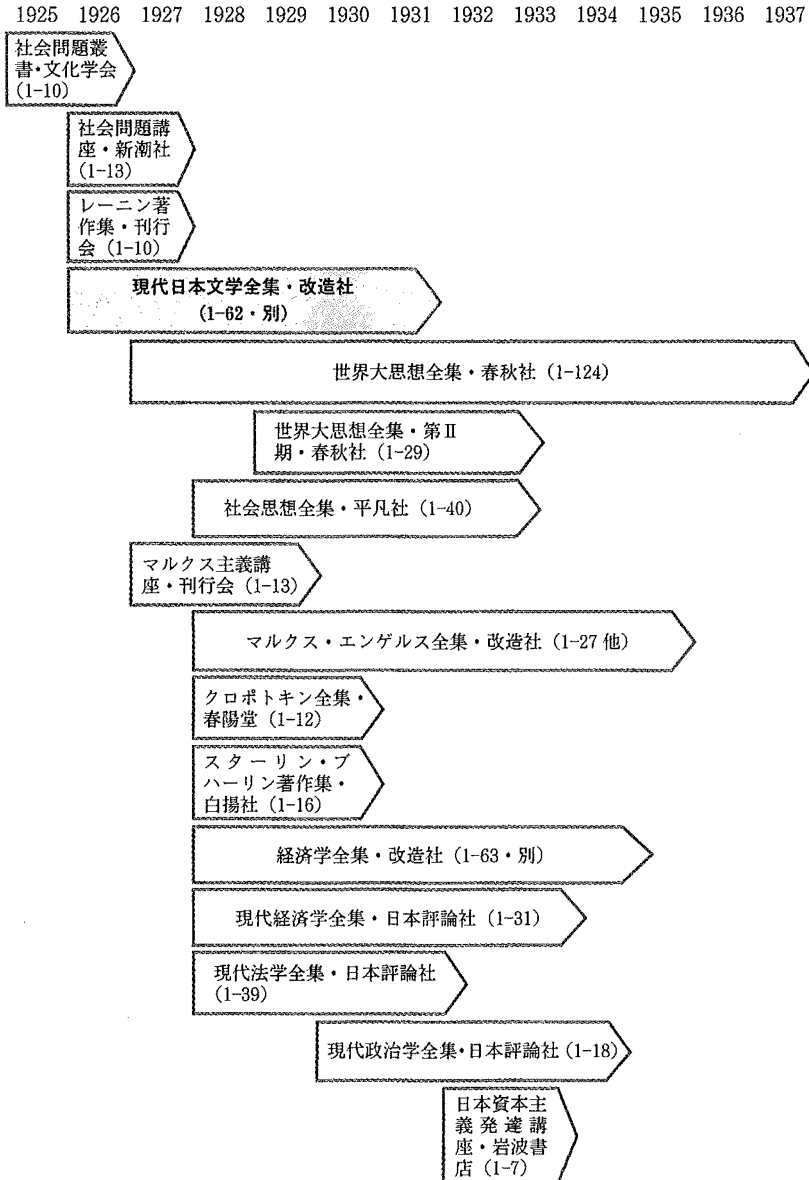


図2 主な社会科学系の講座、円本、全集

想像外であった。その大成功は、他の出版部内に於ても、講座の大流行を招来したほどであった。『社会問題講座』の内容については私は必らずしも、満足す可きものとは言はない。が、隅から隅まで注意のゆきとどいたその編輯振りには敬服の外はない」⁽¹²⁾。

しかし、「プレ円本」時代の「全集物の予約購読者はおもっぱら学者や中産階級」が中心で、「大都市近辺に偏って」⁽¹³⁾おり、「数年間続いたプレ円本ブーム」は過剰で飽きられてきていたとされる⁽¹⁴⁾。「プレ円本」の代表格である『社会問題講座』の編集部後書きでは「近頃所謂講座物続出、聊か食傷気味なり。なかには広告の様式、内容見本の組み、活字の号数、甚だしきは編集後記の書き振まで当講座の模倣を取てせるものがある。模倣の価値は模倣対象を凌ぎて始めて生ず、然らずんば「死」である」⁽¹⁵⁾。

当時文化学会出版部にあった島中雄三は「全集、講座、大系等に、予約出版の興隆本年度の如きは嘗て見なかった。その影響もあろう、単行本の売行は概してみじめなものである。財界の不況ということが勿論主なる原因であるには違いないが、出版者の側にも責任がないとはいえぬ。需要の如何を考慮せずして、やたらに無用の書物を濫造することがその弊の一つである。出版業者としては、一時的の融通をつけるために必要な場合もあるであろうが、その結果は自他共に傷つく訳になる。無暗に大きな新聞広告を競うて互に同業者を喰み合い、購読者には過大の負担を負わせる結果となるを顧みないのも、弊の一つである」⁽¹⁶⁾とした。また岩波茂雄も次のように書く。

講座物全集物の盛行も本年度出版界の特異の事象である。大量生産によりて価格を安くして民衆の知識と趣味とを開発せんとする企図は頗る時宜に適した事であるが徒に広告に宣伝に売らんが為に全力を挙げて、その第一義たる内容に力を尽くす事を怠り羊頭をかかけて狗肉を売る如き事とならば光輝ある出版業の特殊の地位失われて一般の営利事業の水平

線に隋する事とならん⁽¹⁷⁾。

そのようななかでの円本の嚆矢である改造社の『現代日本文学全集』の成功は、一円という価格もさることながら、地方紙にも載せた全面広告をはじめとした「斬新な広告戦略」⁽¹⁸⁾を行い、さらには壱円という低価格について改造社が持たれている「社会主義のイメージを積極的に活用」⁽¹⁹⁾してヒットしたとされる。また「カナダのバルブが生産過剰になり、日本の製紙資本」が大量に安値で輸入したこともこの出版の洪水を後押ししたとされる⁽²⁰⁾。また日本評論社の編集者であった美作太郎は、当時の庶民の購買力や大学生の数からみれば驚異的な円本ブームについて、出版社側の「大正デモクラシーと第一次大戦後の社会的昂揚のもとに蓄積されつつあった民衆の中の読書エネルギーの開発をめざして、不況を逆手に取った政策」に加え、同じく不況からの脱出に努めた製紙業や印刷業など関連産業の発展に支えられていたことを見逃すことはできないとした⁽²¹⁾。とはいえ、何よりも重要なのは、この出版物を受け入れた読者側のパッションであろう。当時、平凡社で『新興文学全集』の編集にかかわった松本正雄は、「文化的財産である「かくも貴重な書物」が「はかり知れないほど多数うしなわれた」関東大震災と、「大杉栄惨殺事件」などそれに乗じた権力側による「大正デモクラシー」の圧殺への動きに対して、すなわち「あの「天災」と「人災」で失われたものをより大きな規模で取りもどしたいという欲求が、わずか「一円」で手にすることができるといふ、その機会をとらえたのであるまいか」と述べている⁽²²⁾。

これについては、当時の流行語となり、また当時の多くの論争のキーワードともなった「大衆化」という言葉に象徴され、「円本は普選によって生み出された900万人の新有権者大衆に明確にその照準を定めていた」とされる⁽²³⁾。紅野謙介は、「荷風はそのあり方に代議制とそれに関わる選挙制度と類似したものを見出した」⁽²⁴⁾ことを指摘した。円本の「仕掛け人」の一人で

ある木村毅は⁽²⁵⁾、円本の効用について、絶版の明治古典や海外の名作や古典が、「田舎の学校の隅々まで」、また「農村海港の末にまで行きわたって、日本が世界共通の文化遺産を頒ちあう猪口^{いとぐち}がついた」とする⁽²⁶⁾。

また翻訳者も含めた著者たちが、この「大事業」に応えうる陣営であったことも重要である。たとえば大澤聡は次のように指摘する。「マルクス主義全盛の最中、左派論客たちが大学から放逐された。彼らは新たな活動の場を商業誌に見出す。(中略)層状になって「高級」を演出する。知的言説の商品化が急速に進行した」⁽²⁷⁾。具体的には、1928年に「いわゆる大学左傾分子の追放が大々的に執行された。河上肇(京都帝大)、大森義太郎(東京帝大)、石濱知行(九州帝大)、佐々弘雄(同)、向坂逸郎(同)らが大学から流出する。そして、彼らは商業ジャーナリズムに地滑りのように侵入した」⁽²⁸⁾とし、また彼らがジャーナリズムで重宝された理由については、マルクス主義が「高い商品価値をもっていた」だけでなく、彼らの「日常的な情報処理能力やマニュアル作成能力の傑出した高さが出版大衆化状況に合致していた」とする⁽²⁹⁾。円本で潤った著作者がいた一方で、多くの著者や訳者は、少ない原稿料で、貧しかったとされる。しかし、何よりも彼らに執筆・発表の機会が多く与えられ、デビューできたことが重要である。

ここで、円本のマイナス面についてまとめておこう。小川菊松は当時を回想した有名な文献で、円本の「功罪については容易に即断は許されない」としつつも、「罪過」の側面として、一般の書籍の価格も低下させ、「苦心研究の著述」の出版が敬遠され、「一夜作りのものばかり乱発」され、「意匠装幀による書籍の個性」も喪失し、いわゆる「悪貨が良貨を駆逐した」ともいえるとした⁽³⁰⁾。

芥川龍之介の『河童』(1927)の世界においては、「驢馬の脳髓」を原料に書籍が大量生産される。小田光男は「昭和初期の円本時代を迎えて、顔のみえないアモルフな消費者に向けて、書物を均一的に大量生産して大バーゲン

をし始める。その渦中に芥川龍之介も否応なしに巻きこまれていく。自らの文学は大衆という読者の出現によって否定されるのではないのか。円本時代の表層の喧騒のなかで、芥川龍之介はそのような不安と疑惑にとらわれ、死へと誘われていったようにも思える。その死の昭和二年が円本の全盛期であったことは、偶然ではない」とする⁽³¹⁾。

また、宮武外骨は、当時の円本流行について持ち前の諧謔を弄して、「版刻の売本が始まった慶長以来未曾有の大弊害なり」としその「害悪の要目」を「円本出版屋の無謀」「円本著訳者の背徳」「凶書尊重の念を薄からしむ」「予約出版の信を失なはしむ」「普通出版界に波及せし悪影響」「多数少国民を荼毒せし文弱化」「広告不信認の悪例を作りし罪」「批評不公正の悪習を促せし罪」「融通金主の当惑」「印税成金の墮落」「国産用紙の浪費」「製本技術の低下」「通信機関の大妨害」「運輸機関の大障害」「一般財界の不景気を助長す」「一般学者の不平心を醸成す」という見出しで「全国各地津々浦々までへも及ぼせし稀代の大流毒なり」と断じた⁽³²⁾。それぞれの説明は省くが、営利目的で質の悪い書物が大量に出回ることへの批判といえる。これは、先に示した「プレ円本」ブームの時と問題点は同じとも言えるが、円本の時代ではその規模ははるかに大きくなる。

実際、大量で「画一的」な全集ものが、限られた書架のスペースを占領し、個性的な単行本を駆逐していくことを想像すれば、円本の罪過についてはある程度理解できる。

そして何よりも過当競争は出版社にとってはこたえるものであった。「企画がかちあって互いに競い合うものも出てきた。日本評論社の「現代経済学全集」、これは改造社が「経済学全集」を出して競争になったため、とうとう日本評論社がやられてしまった」⁽³³⁾。また、次のような影響もあった。「中にも哀れをとどめているのは古本屋である。(中略)神田の某書店の主人は痛くこぼしていた。『まことに困ったもので作者が自分の著作を一円本と

して売りに出しているものですから高い旧版はいくら内容がよくつても売れません、マルクスの資本論なども四冊で二十円以上するものが五円、マーシャルの経済原論なども十五六円もするのが四円か五円という風ですから旧版は売れません』⁽³⁴⁾。

もちろん、売れ残ってもゾッキ屋、古書店、露店という二次市場を通じて流通した円本は、「二段階の大衆化作用」をしているという側面もあり⁽³⁵⁾、「円本が貧しい労働者や農民層にまで本格的に普及していくのは、実はブーム終了後のことに属」した⁽³⁶⁾。円本の売れ残りは、巡り巡って朝鮮京城の三越裏での特価即売会へと、さらに満州や台湾へと「遠征販売」された⁽³⁷⁾。

前稿でも示したように、「戦前の社会問題・社会主義文献の盛況はなぜありえたのか」という問題に取り組んだ梅田俊英は、単に出版言論史について「弾圧と抵抗」という視点からとらえたり、「言論の牢獄」という見方で近代日本を総括するには批判的である」⁽³⁸⁾としていた。確かに大正末期から昭和初期の左翼出版の隆盛を前提とすることは、「落差」の強調につながるわけであるから、この事実の確認は重要である。しかし、一方で、このような出版史をいわゆる社会史として位置づけてみると、政治史とは異なる様相を呈することにも注意しなければならない。社会史的なアプローチでは、独裁体制下でも、社会にはどっこい人間が生きているとして、混乱や無秩序を認め、そして「自由」を発見し、弾圧の側面について軽視する傾向がある。リチャード・ベッセルは、「ナチ時代に民衆がどのように生活していたかを問題にする日常生活史」の危険について次のように述べる。「地方の小さな共同体内部の日常生活に埋没してしまうか、さもなければ狭い意味での好事家的古物収集に墮す危険である。あるいは、第三帝国こそまさに異常事態の連続であったにもかかわらず、近視眼的に民衆の日常生活の“正常”な部分にのみ注意を向け、その生活が、政治——その体制が何百万人をも殺害した——によって形成されたものであった事実を視界から失ってしまう」⁽³⁹⁾。

その点では、次章で示すように、その時代の人権状況を踏まえておくことが、政治的側面の軽視への歯止めになる。人権としての歴史は、個々の人物の政治的境遇を踏まえることで、政治史と社会史をつなぐ役割を果たすといえる。

2 人権と出版

前稿では、この時代における人権問題として、政治犯を救援する運動である「解放運動犠牲者救援会」について論じた⁽⁴⁰⁾。本稿では、円本時代の執筆者や翻訳者の人権状況について触れることにする。この時期、膨大な量の本が企画出版されたのに応じて、多様な執筆者や翻訳者が活躍した。前章でも述べたように左翼的な知識人は、新たな現実に立ち向い、思想や知識を紹介し、展開する役割として歓迎され、表面上には現れない原稿の下書きや下訳をした人々を含めて、多くの有能な若手の執筆者や翻訳者が活躍した。このようなことは、いつの時代でも形を変えて起こり、たとえば戦後でも、マルクス主義を軸として繰り返し新しい思想が紹介される波にのり、多くの新しい書き手が機会を得たが、この時代の状況がその後と決定的に違うことは、当時は活字以外のメディアがほぼなかったことに加え、その後の急速な自由の領域の縮小と執筆者に対する人権抑圧である。

表1、表2では、図2で示した講座、全集や円本のシリーズのうちの主なものについての政治的に抑圧された著者や翻訳者について示している⁽⁴¹⁾。表1の著者や翻訳者のうちゴチック下線の人名は、検挙⁽⁴²⁾された者や大学などから追放された者たちを示し、具体的な弾圧形態は表2に示している。実際には、このような状況下で、多くの出版物が、なんとか発禁などにならないように、当局と相談することも含めて、自主規制したり、また編集方針を「転向」したりするなどした。円本に象徴される出版物の洪水は、「左」

円本と人権

がせき止められて、「右」に流れが転換していくことになるので、単に直接的な弾圧だけでは自由の縮小は語れない。このような弾圧者リストは、この時代に多数発刊されていた左翼の雑誌の執筆者をみればもっと厳しい結果になるはずである。また本稿では、1930年を軸にして考察したので、検挙などの弾圧歴も、治安維持法公布の年である1925年以後に限ることとして、初期社会主義時代の明治期から大正期の弾圧歴については含めていない。たとえば学問への弾圧の代表例ともされる1920年の森戸事件の森戸辰雄は、この時期には「クロボトキン研究で、東大教壇を追われ、しばらく圀圖の人となったため、名声はいよいよ上がって、その光彩陸離たる研究は、左翼青年渴仰の的だった」⁽⁴³⁾ともなり、ここではゴチック太字として示されていない。

表1 主な社会科学系の講座、円本、全集

* ゴチックの人名は、1925年以降に政治的に弾圧された者（表2を参照）

社会問題叢書/文化学会出版部					
1	1925	現代社会生活の不安と疑問	堺利彦	6	1925 資本主義と戦争 松下芳男
2	1925	労農露西亞の労働	山川均	7	1925 自由恋愛と社会主義 守田有秋
3	1925	日本労働運動発達史	赤松克麿	8	1925 婦人問題と婦人運動 山川菊栄
4	1925	無産階級の世界史	上田茂樹	9	1925 インタナショナル発達史 浅野研真
5	1925	産児制限の理論と実際	安部磯雄, 馬島俊	10	1926 資本主義と農村問題 中沢弁次郎
社会問題講座/新潮社（論文が複数の巻にわたる場合、初出の巻にのみ記載）					
1	1926	社会問題総論, マルキシズム概説, サンヂカリズム, ギルド・ソシアリズム, 社会思想発達史, 社会学史, 経済史概論, 失業問題, 資本主義と農政問題, 無産者政党発達史, 婦人の自覚史, 日本民権発達史, ロシア革命史, 水平運動発達史, 英国フェビアン協会発達史, 売淫論, 社会組織と新聞雑誌		安部磯雄, 高島素之, 石川三四郎, 北沢新次郎, 波多野鼎, 新明正道, 石浜知行, 堀江帰一, 河田闕郎, 山川菊栄, 白柳秀湖, 富士辰馬, 吉井浩存, 川原次吉郎, 村島帰之, 早坂二郎	
2	1926	近世小作制度の発達, 普通選挙と無産政党, 無産者政党発達史, 無産階級文芸論		小野武夫, 安部磯雄, 藤森成吉	
3	1926	経済学概論, 経済学史, 金論, 各国労働者教育発達史, 社会運動と知識階級		安部磯雄, 久留間鈞造, 堀江帰一, 浅野晃, 麻生久	
4	1926	日本労働運動発達史, インターナショナル発達史, 階級闘争史, 消費組合論		赤松克麿, 青野季吉, 西雅雄, 岡本利吉	

政経論叢 第84巻第5・6号

5	1926	アナーキズム, 労働契約論序説, 社会心理学, 労働組合と労働者教育文学の社会学的研究方法及びその適用, 我が国の婦人運動, 社会運動家及社会思想家列伝	新居格, 平野義太郎, 市村今朝蔵, 阪本勝, 平林初之輔, 奥むめお, 大宅壮一
6	1926	産業革命史, 日本経済の現状, 日本の労働問題, 社会主義と農民運動, 世界無産者政党発達史, 借家争議の戦術, マルサスの人口論	上田貞次郎, 高橋亀吉, 浅利順四郎, 稲村隆一, 布施辰治, 布川静瀨
7	1926	財政学概論, 日本社会主義史, 世界労働運動発達史, 各国労働者教育発達史, 法廷に於ける小作争議, 中間階級論, 生物学と産児制限	大内兵衛, 木村毅, 浅野晃, 水谷長三郎, 青野季吉, 山本宣治
8	1926	労働法制史研究, 世界資本主義経済の現勢, 社会階級論, 社会統計論, 日本の労働事情, 日本に於ける農民運動の現勢, 世界労働運動発達史, 治安維持法批判, 資本主義文化と社会主義文化, 社会政策	滝川政次郎, 丸岡重亮, 服部之總, 岡崎文規, 村島婦之, 杉山元治郎, 清瀬一郎, 平林初之輔, 小林輝次
9	1926	人間行動の社会学, 日本社会史, 世界労働運動発達史, 支那の社会思想と社会運動, 民衆娯楽問題, 無産政党と労働組合, マルクス国家論	長谷川万次郎, 本庄栄治郎, 宮崎龍介, 権田保之助, 麻生久, 河野密
10	1926	土地国有論, 共同社会と利益社会, 社会倫理学, 農民運動の世界的現勢一斑, 世界資本主義経済の現勢, 帝国主義論, セツツルメント, 社会運動家及社会思想家列伝	安部磯雄, 波多野鼎, 淡徳三郎, 河西太一郎, 丸岡重亮, 猪俣津南雄, 大林宗嗣, 大宅壮一
11	1927	基督教社会主義論, ロンヤ無産階級文学の発達, 世界労働運動発達史, インタナショナルの現勢, 恐慌論, 日本資本主義発達史	賀川豊彦, 片上伸, 藤井米三, 野呂栄太郎
12	1927	明治政治史の一節, 婚姻制度, 労働協約法概論, 教育に於ける国家的統一と社会的多様, 原始宗教と社会主義, 日本労働運動の現況, 農民と政治運動, 各国無産政党の現勢	吉野作造, 穂積重遠, 末弘敬太郎, 長谷川万次郎, 嘉治隆一, 村島婦之, 莊原達
13	1927	本邦に於ける社会経済組織の推移, 労働組合論, 共産部落の研究, 各国無産政党の現勢, 政治行動と政治意識社会と教育, 無産政党論, 商品価値の批判序説	高野岩三郎, 野坂鉄, 阪本勝, 長谷川万次郎, 森戸辰男, 大山郁夫, 稲田民蔵
レーニン著作集/レーニン著作集刊行会			
1-10	1926-1927	訳者: 山川均, 青野季吉, 佐野文夫, 佐野学, 西雅雄, 林房雄, 井上満, 山内封介	

円本と人権

世界大思想全集/春秋社 (一部は松柏館書店)			訳者			
1	1928	国家/ブラトーン、感情論/デカルト	村松正俊、三宅茂	18	1927	人口論/マルサス 神永文三
2	1929	メタフェジカ/アリストテレス、モノイド論/ライブニッツ	岩崎勉、松永材	19	1930	サータア・リザータス、英雄及英雄崇拜/カーライル 柳田泉
3	1927	語録/エピクテタス、瞑想録/アウレリウス、幸福論/セネカ	佐久間政一、村山勇三、加藤朝鳥	20	1929	知識学、宗教学/ファイヒテ 河面仙四郎
4	1928	随感録/バスケル、懺悔録/オーガスチン	柳田泉、宮原晃一郎	21	1931	代表偉人論、自然論、論文鈔/エマアソン 柳田泉
5	1928	法の精神/モンテスキウ、君主論/マキアヴェリ	木村幹、橋田東聲	22	1929	精神分析/フロイド、論文集/ショウベンハウエル 中村古映、佐久間政一
6	1930	プリンシピア/ニウトン	岡邦雄	23	1928	人生論、我等何を為すべきか、芸術論/トルストイ 柳田泉、加藤一夫、古館清太郎
7	1927	ノーヴム・オルガナム/ベーコン、方法通説/デカルト、民約論/ルソオ	岡島亀次郎、村松正俊、加藤一夫	24	1928	功利論/ベンサム、自由論・功利主義・婦人の隷従/ミル 田制佐重、高橋久則
8	1929	ツァラトゥストラは斯く語る、此の人を見よ/ニーチェ	加藤一夫	25-26	1928-1931	実証哲学、上下/コント 石川三四郎
9	1930	絵画論/ダヴィンチ、詩と真実/ゲーテ、素朴の文学と感傷の文学/シラア	加藤朝鳥、秋田忠義、佐久間政一	27	1927	種の起原/ダーウィン 内山賢次
10	1927	エミール/ルソオ	平林初之輔	28	1927	第一原理/スペンサー 澤田謙
11-12	1928	国富論、上下/スミス	青野季吉	29	1928	唯一者とその所有/スティルネル、芸術と宗教、無政府主義と社会主義/ブレカアノフ 辻潤
13	1930	悟性論/ロック、人性論/ヒューム	八太舟三、香原一勢	30	1928	経済学批判・賃銀労働及資本・価値価格及び利潤/マルクス、空想的科学的社会主义/エンゲルス、帝国主義論/レーニン 安倍浩、青野季吉
14	1927	ラオコオン/レツシグ、レオバルチ集/レオバルチ	柳田泉	31	1929	ルネッサンス/ペーター、論文集/アーノルド、アンツ・チス・ラスト/ラスキン 佐久間政一、中林群一、宮島新三郎
15	1931	純粹理性批判/カント	安藤春雄	32	1930	ウオルデン/ソーロー、文明論/ホイットマン、論文集/カアベンタア 古館清太郎、宮島新三郎
16	1930	社団的社会主义要綱/フリーエ、労働階級の政治的能力/ブルウドン	安谷寛一、石川三四郎	33	1927	婦人論/ペーベル 加藤一夫
17	1930	政治的正義/ゴッドウィン	加藤一夫	34	1928	田園工場及仕事場、相互扶助、近代科学と無政府主義/クロボトキン 室伏高信、八太舟三

35	1930	無政府主義思想史/ネット ラウ, マルクス説の崩解/ ソレル	新居格, 百瀬 二郎	49	1927	ゲルトルード/ベスタロッ チ, 人間の教育/フレー ベル, 哲学と教育学/ナ トルプ, 民主主義と教 育/デュエイ	田制佐重
36	1930	憂愁の哲理/キエルケゴ ール, 意識に直接与へられた もの/ベルグソン, 社会に 就いての新見解/オーエン	宮原晃一郎, 広瀬哲士, 加 藤一夫	50	1929	太陽の都/カンパネラ, ユートピア/モアア, 無 何有郷通信記/モリス, ニュー・アトランティ ス/ペーコン	加藤朝鳥, 村 山勇三, 大戸 徹誠
37	1929	社会学原理/ギッディング ス, 社会学要論/ウオード	内山賢次	51	1930	仏典篇	友松円諦, 田 島德音, 東海 裕山, 林岱雲 編
38	1928	メンデルの遺伝原理/ベ ートスン	小酒井不木	52	1929	東西宗教文献篇	野々村戒三編
39	1929	創造的統一/タゴール, 論文集/ガンデイ, 建說的 文学革命論其他/胡適	古館清太郎, 高田雄種, 柳 田泉	53	1931	支那思想篇	山口剛編
40	1931	真理の意味/ジェームズ, 論理学/ヘーゲル, 神と国 家/バクーニン	岡島亀次郎, 岩崎勉, 麻生 義	54	1927	日本思想篇	井荻節三編
41	1930	科学概論/ピアソン	平林初之輔	55	1931	社会学上より見たる芸 術/ギュイヨオ	西宮藤朝
42	1931	カントとマルクス主義, マ ルクス主義の国家観/アド ラー	井原紘	56	1931	歴史哲学/リッケルト, 純粹論理学へのプロロー グ/メナ/フッセル	山本泰教, 鬼 頭英一
43	1929	エティカ/スピノザ, 精神 現象の分類に就いて/ブレ ンタノ, カント純粹理性批 判解説/コヘン	中山昌樹, 佐 藤慶二, 今田 竹千代	57	1932	イマヌエル・カント/パ ウルゼン, 意志の自由/ ヴィンデルバント	伊達保美, 丸 山岩吉, 戸坂 潤
44	1931	力学対話/ガリレイ, 新キ リスト教論/シモン, 生命 力の発展/ユング	岡邦雄, 安谷 寛一, 中村古 峯	58	1932	充足根拠の原理, 倫理の 二つの根本問題/ショ ペンハウエル	河合哲雄
45	1929	社会学理論/コール, 社会改 造の原理/ラッセル, 社会 学的国家概念と法律学的国 家概念/ケルゼン	村上啓夫, 堀 真琴	59	1932	歴史哲学/ヘーゲル	鬼頭英一
46	1930	美学/クローチエ	長谷川誠也, 大概憲二	60	1931	経済と社会, 社会科学方 法論/シュバン, 現代の 国家と社会/フィアカン ト	向井鉄一, 谷 藤重吉
47	1928	マルキシズムの改造/ベル ンシュタイン, マルキシズ ム修正の駁論/カウツキー	松下芳男, 山 川均	61-62	1931	ヴェニスの石, 上下/ラ スキニ	賀川豊彦
48	1930	相対性理論/アインスタイ ン, エネルギー恒存の原理, 物理学的展望/プランク	石原純	63	1932	経済学及び課税の諸原理, 附・穀物の低き価格, 農 業保護論/リカアドウ	吉田秀雄

円本と人権

64	1932	政治学範典/ラスキ	市村今朝蔵	86	1933	共同村の歴史, 下, 経済学の第一原理/ジード, 資本主義の将来/ゾムバルト	八太舟三, 鈴木晃
65-66	1931-1932	古代文明研究, 太陽の子, 上下/ペリー	加藤一夫	87	1934	物質創造史/スロッソン	須澤官一郎, 蛭山芳郎
67-69	1933	近世画家論, 1-3/ラスキン	御木本隆三	88	1934	反マルクス論, 下/ムース	草間平作
70	1932-1933	ヴィコの哲学/クロオチエ, 西洋中世哲学概観/ウルフ, プラトン哲学体系/バアネット	青木巖	89	1934	文学的回想/ツウルゲーニエフ, 黎明期の思想家/ブランデス	宮原晃一郎
71	1932	哲学辞典/ヴォルテール	安谷寛一	90	1934	性と性格/ワイニンゲル	村上啓夫
72	1933	マコーレー論文集/マコーレー	戸川秋骨	91	1935	倫理学の根本問題/リップス	鬼頭英一
73	1933	共同社会と利益社会/トエンニース, 共同村の歴史, 上/ジード	鈴木晃, 八太舟三	92	1934	性と文学/モデル	奥俊貞
74	1933	経済学の領域及び方法/ケインズ	濱田恒一	93	1934	人生の意義と価値/オイケン, 中世思想より見たる美の哲学/ロザア	陶山務
75	1932	純正現象学的及現象学的哲学観/フッセル	鬼頭英一	94-95	1934	社会主義と資本主義, 上下/ショオ	加藤朝鳥
76	1933	精神諸科学序説, 上/ディルタイ	鬼頭英一	96	1934	新しき社会/ラアテナウ, 読書論: 胡麻と百合/ラスキン	陶山務, 本間立也
77	1933	純粹哲学概論/バウン	賀川豊彦, 八太舟三	97	1934	過去と現在/カーライル	柳田泉
78	1933	宗教論/エームス	神保勝世	98	1934	偉大なる創造者ベートオベン/ロラン	高田博厚
79	1934	音楽と音楽家, 上/シューマン, ショパンの生涯/ハネカー	鈴木賢之進	99	1934	経済学原理/マルサス	吉田秀夫
80	1933	プラトーンとプラトーン主義, ギリシャの芸術/ベーター	八太舟三	100	1936	永久的価値/ミュンスタベルヒ	渡利弥生
81	1932	近世画家論, 4/ラスキン	御木本隆三	101	1936	羅馬美学/ボサンケ, 美意識論/サンタヤナ	鷺尾雨工
82	1935	惜性善導/スピノザ, 本質意志と選択意志/テニス	鈴木晃	102-3	1936	美学, 上下/リップス	佐藤恒久
83	1933	精神諸科学序説, 下/ディルタイ	鬼頭英一	104-5	1935	音楽と音楽家, 中下 a/シュウマン	鈴木賢之進
84	1933	ルソオとロマンティズム/バビット	葛川篤, 土戸久夫	106-8	1935-1937	国法学の主要問題, 上, 中下の 1/ケルゼン	蛭山芳郎, 武井武夫
85	1933	反マルクス論, 上/ムース	草間平作	109	1935	労働学校/ブロンスキー	堀秀彦

政経論叢 第84巻第5・6号

110-1	1936-1937	経済学原理, 上, 中/ミル	高橋高三	120	1935	教育と文化/シュブランガー	柿崎純
112		(未刊)		121	1936	児童心理学/ビネー	波多野完治
113-4	1936-1937	意志と表象としての世界, 上中/シヨベンハウエル	図南坦	122	1936	音楽と音楽家, 下b/シューマン	鈴木賢之進
115	1935	新国家論/メンガー	河村又介	123	1935	法律社会学原理/エルサレム	内山慶之進
116-7	1935	社会分業論, 上下/デュルケーム	山崎早市	124	1937	意志と表象としての世界, 下/シヨベンハウエル	図南坦
118-9	1935	プレルウディエン: 哲学序曲, 上下/ヴィンデルバンド	陶山務				
世界大思想全集第Ⅱ期/春秋社							
1-5	1929-1930	訳文大日本史, 1-5	山路愛山	17-20	1931-1933	独逸社会民主党史, 1-4/メーリング	米田幸雄, 高村洋一, 塚本三吉
6-9	1929-1930	羅馬衰亡史, 1-4/ギボン	野々村戒三	21-22	1929	英国社会主義史, 1-2/ヴェーバー	加田哲二, 園乾治
10	1930	文芸復興史/ブルックハルト	山岸光宣	23-24	1929-1930	唯物論史, 1-2/ランゲ	賀川豊彦
11-12	1929-1930	仏蘭西革命史, 上下/カーライル	柳田泉	25	1931	羅馬衰亡史, 5/ギボン	内ヶ崎作三郎
13-15	1929-1932	十九世紀文学主潮史, 1-3/ブランデス	吹田順助, 茅野蕭々, 淵田一雄, 宮島新三郎, 内藤濯, 葛川篤	26-28	1929-1931	世界文化史, 1-3/ウェルズ	北川三郎
16	1931	マキャヴェリよりレーニンまで/フォルレンダア	服部実, 佐々弘雄, 横川次郎	29	1930	十九世紀文学主潮史, 4/ブランデス	茅野蕭々
社会思想全集/平凡社			訳者				
1	1929	無何有郷だより/モリス, 回顧録/ペラミー, 太陽の国/カムパネラ, ユートピヤ/モーア	布施延雄, 堀利彦, 守田有秋	4	1930	批判的・建設的社会主義/マクドナルド, 労働党と新世界/スノーデン	奥俊貞, 早坂二郎
2	1930	平等の教義/バベウフ, 欧州社会の再組織, 新基督教/サン・シモン, 新基督教術義/ロドリイグ, フウリエ社会科学/フウリエ	石川三四郎	5	1931	革命及び反革命/マルクス, エンゲルス, フランスに於ける内乱, ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日/マルクス	後藤貞治, 山川均
3	1932	社会に就ての新見解/オーエン, 労働の組織/ブラン	加藤一夫, 浅野研真	6	1928	経済学批判, 哲学の貧困, ゴータ綱領批判他/マルクス	猪俣津南雄, 近藤栄蔵, 堀利彦, 岡田宗司

円本と人権

7	1930	神聖家族、反デューリング論/エンゲルス、マルクス	河野密	19	1931	文学と革命、無産者文化論/トロツキー	茂森唯士、武藤直治
8	1931	家族・私有財産及国家の起原、社会主義の発展、××主義原則/エンゲルス	田中九一、堺利彦	20	1931	通俗資本論/ボルハルト	水谷長三郎
9	1928	唯物論と経験批判論/レーニン	山川均	21	1930	全労働収益権史論/メンガア、軍国主義論/リーブクネヒト	森戸辰男、松下芳男
10	1931	プロレタリア革命と背教者カウツキー、何を為すべきか、帝国主義論/レーニン	山川菊栄、青野季吉	22	1928	マルクス歴史・社会・国家学説/クノウ	河野密
11	1928	婦人論/ペーベル	山川菊栄	23	1929	無産階級の哲学/ドイツゲン、戦間的唯物論者レーニン/デボーリン、宗教の起源其他/ラファルグ	山川均、大森義太郎、荒畑寒村
12	1929	エルフルト綱領、民主主義か独裁主義か、農業理論、倫理と唯物史観/カウツキー	赤松克麿、笠置通、堺利彦	24	1929	マルクス主義芸術論/ルナチャールスキー、レーニズムの基礎/スターリン、コミュニスト・インタナショナルの戦術/ジノヴィエフ、無産階級芸術論/ボグダノフ	昇曙夢、近藤栄蔵、山内房吉、麻生義
13	1929	マルキシズムの修正、経済制度と経済発展/ベルンスタイン	守田有秋、松下芳男	25	1929	唯一者と其所有/ステイネル、社会及個体に於ける権力への意思、芸術に於ける権力への意思/ニイチエ	生田長江、高橋清
14	1929	資本蓄積論、資本蓄積再論/ルクセンブルグ	宗道太、益田豊彦、高山洋吉	26	1931	財産とは何か/ブルードン	鏈田研一
15	1931	金融資本論/ヒルファディング	林要	27	1931	十九世紀における革命の一般思想/ブルードン、無政府主義経済学/ロビンソン	延島英一
16	1929	史的唯物論とマルクス派経済学/クロオチエ、社会主義と近世科学/フェリー、社会主義と哲学/ラブリオーラ	西宮藤朝、浅野研真	28	1930	神と國家/バクーニン、共産党宣言の種本/チエルケゾフ、共産党宣言の根本思想/ラブリオーラ、無政府論、対話二篇/マラテスタ、原始社会の研究、進化と革命/ルクリュ	八太舟三、延島英一、麻生義、石川三四郎
17	1930	史的一元論、芸術と社会生活、プロレタリア運動とブルジョア芸術/ブレハノフ	川内唯彦、蔵原惟人	29	1929	反逆者の言葉、近代科学と無政府主義、近代国家論/クロボトキン	石川三四郎、望月百合子、新居格、麻生義
18	1930	××主義 ABC、資本主義の安定と無産階級運動/ブハーリン	山川均、荒畑寒村、岡田宗司	30	1928	相互扶助論、田園・工場・仕事場/クロボトキン	室伏高信、百瀬二郎、麻生義

31	1928	倫理学：起源と発達，無政府主義者の道徳，サンディカリズムと無政府主義，コムニズムと無政府主義，ハーバート・スペンサーその哲学，正義と道徳/クロボトキン	平林初之輔， 室伏高信，麻生義	36	1929	プロレット・カルト/セダ・ポール，婦人の隷属/ミル，創造的革命/エデン・ポール，セダ・ポール，直接行動/メラア	北島修一郎， 島中雄三，平塚らいてう
32	1929	政治的正義に関する研究/ゴドウィン，戦争と平和，現代教化論/ケイ，新時代の曙/モリス，文明・その原因と救済/カーペンター	松本悟郎，本間久雄，古館清太郎	37	1928	社会主義と宗教/スバルゴ，マルクス主義と社会主義/シンコヴィチ，宗教の利潤/シンクレア	島中雄三，吉川末次郎， <u>高津正道</u>
33	1930	財産進化論/ラファルグ，暴力論/ノレル	荒畑寒村，石川三四郎，望月百合子	38	1931	資本主義と社会主義/ボーレー，今日の社会主義/ブレイルスフォード，社会主義とは何ぞや/カーカップ	松下芳男，高戸義太郎，島中雄三
34	1928	資本主義文明の崩壊，大英社会主義国の構成，消費組合の将来/ウエップ	安部磯雄，丸岡重亮，山村喬	39	1932	社会思想史	島中雄三，山内房吉
35	1928	社会改造の諸原理/ラッセル，産業自治論/コール，帝国主義論/ホブソン	松本悟郎，島中雄三，時国理一	40	1933	社会問題辞典	島中雄三編
マルクス主義講座/河上肇，大山郁夫監修/政治批判社編/マルクス主義講座刊行会							
1-13	1927-1929	浅野晃，佐野学，秋笹正之輔，門屋博，木下半治，関根悦郎，和田叙三，高山洋吉，村山藤四郎，服部之助，淡徳三郎，河上肇，高村洋一，福岡敏男，野呂崇太郎，園金之助，野村襄二，草野幸一，三上英雄，武藤丸楠，浅見輝夫，笠虎之助，大川権三，中野重治，大山郁夫，岩井保夫，松井剛，横瀬毅八，村上哲夫					
マルクス・エンゲルス全集/改造社							
1-27	1928-1935	訳者：服部英太郎，河野密，後藤信夫，石浜知行，楢崎陣，新明正道，齋治隆一，堺利彦，稲村順三，塚本三吉，河西太一郎，菊川忠雄，山村喬，小岩井浄，笠信太郎，宗道太，山口正吾，河村又介，小林良正，佐々弘雄，中川善之助，加田哲二，山川均，後藤貞治，平井新，片瀬住，阪本勝，住谷悦治，松沢兼人，堀真琴，林要，螺山政道，岡田宗司，猪俣津南雄，桑田梧郎，横川次郎，平井鎮夫，島海篤助，水島健治，向坂逸郎，荒畑勝三，浜島正金，大森義太郎，平貞蔵，宇野弘蔵，伊藤好道，荏原達，羽田貞一，田中九一，土屋喬雄，高井三郎，有沢広巳，浅野正一，河元真澄，大塚金之助，山口修，不破信一，倉岡稔，小菅省三，横田宗司，福田徳三，本多謙三，山村敏雄，青野季吉，亀井純，日下部良治，阿部得二，長野兼一郎，佐々木義章，安岡時夫，豊島義作，轟三郎					
クロボトキン全集/春陽堂							
1-12	1928-1930	訳者：石川三四郎，久保譲，小池英三，能智修弥，大杉栄，麻生義，八太舟三，新居格，岩佐作太郎					
スターリン・ブハーリン著作集/白揚社							
1-16	1928-1930	訳者：佐野学，西雅雄，高山洋吉，田畑三四郎，蔵原惟人，丸目秋一，小林良正，山口正吾，外村史郎，佐野文夫，大橋祐，川瀬欽吾，安田鶴雄，小菅省三，藤井米三，武藤丸楠，上村正夫，門屋博，中野重治，長島又男，栗原佑，大澤清一，益田豊彦，上西薫，小林俊雄，広島定吉，直井武夫，菊田豪蔵，泉重雄，山口信治，入江武一，対馬俊次，三好信，松本篤一，平井信，有村俊雄，澤田三郎，森山啓，吉村進，鹽沢明，岩田義道					

円本と人権

経済学全集/改造社						
1	1928	経済学大綱	<u>河上肇</u>	23	1929	経済学前史 高橋誠一郎
2	1928	経済学原理、総論及生産編	福田徳三	24	1932	極東に於ける帝国主義 猪俣津南雄
3-4	1930	経済学原理、流通編、上下	福田徳三	25	1932	満蒙政治経済提要 東亜経済調査局編
5	1932	経済学の基礎理論	中山伊知郎, 高垣寅次郎, 高田保馬	26-27	1929	マルクス経済学説の発展, 上下 河西太一郎, 猪俣津南雄, <u>向坂逸郎</u> , <u>山川均</u> , 桧六郎, <u>林要</u> , <u>小林良正</u> , <u>伊藤好道</u>
6-7	1929	経済学特殊理論, 上下	内池廉吉, 大熊信行, 高城仙次郎, 小林新, 田中金司, 坂西由蔵, 小島精一, 藤井万三郎	28	1933	世界経済史 田崎仁義, 坂西由蔵, 武藤長蔵, 加藤繁
8	1929	マルクス主義経済学の基礎理論	<u>河上肇</u>	29	1929	各国経済史 野村兼太郎, 丸岡重亮, 石浜知行, 平貞蔵, 嘉治隆一
9	1933	経済哲学	杉村廣蔵, 二本保幾	30	1930	日本社会経済史 本庄栄治郎
10-12	1931-1932	資本論体系, 上中下	<u>向坂逸郎</u> , 樺田民蔵, 岩城忠一, <u>宇野弘蔵</u> , <u>山田盛太郎</u>	31	1930	日本経済史 高橋亀吉, 石橋湛山, 野村兼太郎, 小野武夫, 土屋喬雄, 鈴木茂三郎
13	1931	部門経済学	小林行昌, 小島昌太郎, 中川正左, 小島精一, 林癸未夫, 河田嗣郎, 蜷川虎三	32	1929	唯物史観経済史 <u>山川均</u> , <u>石浜知行</u> , 河野密
14	1932	恐慌学説	谷口吉彦, 南部誠一郎, 氷川透	33	1931	恐慌下の日本資本主義 猪俣津南雄
15-16	1930	経済政策, 上下	河津通, 氣賀勘重, <u>八木澤善次</u> , 竹内謙二, 小島昌太郎, 高島佐一郎	34, 上	1931	世界経済統計図表 <u>有沢広巳</u> , <u>高橋正雄</u>
17	1932	協同組合と農業問題	那須皓, 東畑精一	34, 中下	1932	日本経済統計図表 <u>有沢広巳</u>
18	1929	社会政策	波多野鼎, 山村喬, <u>山川均</u> , <u>田中九一</u>	35	1930	統計学, 上 <u>有沢広巳</u> , 小倉金之助, 森数樹
19-20	1929-1930	財政学, 上下	阿部賢一, 小川郷太郎, 青木得三, 河本文一, 小林丑三郎, 田中広太郎	36	1929	経営経済学 増地庸治郎, 吉田良三, 太田哲三
21	1929	租税論	神戸正雄	37-38	1929-1931	商業学, 上下 向井鹿松, 呉文柄, 内池廉吉, 野村兼太郎, 黒正蔵, 藤本幸太郎, 小田内通敏, 佐藤弘
22	1932	日本財政論, 公債編	<u>大内兵衛</u>	39	1930	産業革命史 上田貞次郎

40	1930	特殊問題	渡邊鎮藏, 細貝正邦, 松宮三郎, 鈴木茂三郎	52	1933	本邦社会統計論	権田保之助, 高橋正雄, 高野岩三郎, 有沢広巳
41-42	1929	現代日本経済の研究, 上下	河津暹, 勝田貞次, 鈴木茂三郎, 太田正孝, 高橋亀吉, 服部文四郎, 本多静六, 木村増太郎, 早川直瀬, 沢村康	53	1932	日本財政論 租税篇	阿部勇
43	1930	産業合理化	有沢広巳, 阿部勇	54	1933	日本経済統計図表, 補	有沢広巳
44	1930	統計学, 下	有沢広巳, 小倉金之助, 森数樹, 竹下清松, 藤本幸太郎, 小林新	55	1933	世界経済の動向と金本位制の将来	山室宗文
45	1931	経済法令集	田中耕太郎編	56-58	1932	経済学辞典, 上中下	塚本三吉編集代表
46	1931	金解禁を中心とする我国経済及金融	山室宗文	59	1933	近世日本農村経済史論	土屋喬雄, 小野道雄
47	1931	カルテル・トラスト・コンツェルン, 上下	有沢広巳, 美濃部亮吉	60	1933	世界経済学	作田莊一
48	1932	唯物史観	大森義太郎	61	1933	朝鮮社会経済史	白南雲
49	1934	経済学史	加田哲二, 小泉信三, 増井幸雄, 高橋誠一郎	62	1933	経済地理学総論	佐藤弘
50	1933	剰余価値学説略史	森戸辰男, 笠信太郎	63	1934	日本戦時経済論	慶応義塾大学日本経済事情研究会編
51	1933	貨幣・信用及びインフレーションの理論	猪俣津南雄	別巻	1931	世界恐慌と国際政治の危機	有沢広巳, 阿部勇
現代経済学全集/日本評論社							
1	1928	経済学総論	土方成美	12	1930	銀行論	高垣寅次郎
2	1931	経済原論	小泉信三	13	1928	景気変動論	高田保馬
3	1929	経済学原論	河田嗣郎	14	1930	金融論	牧野輝智
4	1929	マルクス経済学	高島素之	15	1931	農業政策	那須皓
5	1930	欧州経済史	本位田祥男	16	1929	工業政策, 交通政策	小島精一, 増井幸雄
6	1929	日本経済史	本庄栄治郎, 黒正巖	17	1930	商業政策	上田貞次郎
7	1929	経済学史	高橋誠一郎	18	1928	財政学, 日本租税論	神戸正雄
8	1931	社会政策原理	河合栄治郎	19	1929	保険学要論	小島昌太郎
9	1929	社会問題各論	林癸未夫	20	1929	統計学	汐見三郎
10	1930	貨幣論	橋爪明男	21	1929	商業問題	内池廉吉, 河津暹, 向井鹿松, 油本豊吉
11	1929	貨幣制度	高垣寅次郎, 荒木光太郎	22	1931	土地経済論, 人口論, 植民政策	河田嗣郎, 永井亨, 金持一郎

円本と人権

23	1929	会計学	高瀬莊太郎	28	1932	世界恐慌	上田貞次郎, 高垣寅次郎, 東畑精一, 永雄策郎
24	1931	経営経済学	中西寅雄	29	1932	賠償問題, 世界恐慌とブロック経済	増井光蔵, <u>蛸山政道</u>
25	1930	日本経済図表	猪間驥一編	30	1933	企業財政論	高瀬莊太郎
26	1931	世界経済図表	猪間驥一編	31	1933	技術と経済	馬場敬治
27	1932	本邦貨幣制度改正論, 限界効用学説史/アモン	山崎寛次郎, 楠井隆三訳				
現代政治学全集/日本評論社 未刊については、『叢書全集書目』第参輯, 東京古書籍組合, 1933による							
1	1930	政治学概論	戸沢鉄彦	10	1930	現代の政党	高橋清吾
2	1934	政治思想	五来欣造, 廣瀬哲士	11	1930	無産政党論	<u>蛸山政道</u>
3	未刊	(マルクシズム政治学)	(佐々弘雄)	12	1931	自治制度論	渡辺宗太郎
4	1931	政治学説史	今中次麿	13	1930	近世外交史	信夫淳平
5	未刊	(近代政治史)	(奥平武彦)	14	未刊	(近代国際政治学)	(神川彦松)
6	1930	日本憲政史	尾佐竹猛	15	1934	直接民主政治	河村又介
7	1930	議会制度論	美濃部達吉	16	1933	現代独裁政治論	堀真琴
8	1931	選挙制度論	森口繁治	17	未刊	(各国政治の現勢)	(神川彦松)
9	1930	行政組織論	<u>蛸山政道</u>	18	未刊	(政治学辞典及総索引)	(編集部)
日本資本主義発達講座/岩波書店							
1-7	1932-1933	羽仁五郎, 服部之總, 伊豆公夫, 中島信衛, 山田盛太郎, 小林良正, 玉城肇, 平野義太郎, 田勝次郎, 丸山一郎, 木村恒夫, 大塚金之助, 渡邊謙吉, 稻岡暹, 小川信一, 田中康夫, 風早八十二, 秋笹正之輔, 秋田雨雀, 山田清三郎, 山下徳治, 小倉金之助, 岡邦雄, 井汲卓一, <u>相川春喜</u> , 坂本三善, 鈴木小兵衛, 西雅雄, 大内兵衛, 土屋喬雄, 小野武夫, <u>細川嘉六</u>					

表2 円本執筆・翻訳者の政治犯リスト

* 表1掲載者のみ

50 音順	1925 年以降の検挙歴, または教職からの追放等 (事件名)
相川 春喜	29 年検挙, 30 年検挙, 31 年検挙, 33 年検挙, 36 年検挙 (コム・アカデミー) (本名: 矢波久雄)
青野 季吉	38 年検挙 (人民戦線)
秋笹正之輔	26 年検挙 (京都学連), 29 年検挙 (4・16), 34 年検挙 (共産党スパイ査問), 43 年出獄後死亡 (本名: 政之輔)
秋田 雨雀	33 年検挙 (共産党シンパ), 40 年検挙 (新劇) (本名: 徳三)
浅野 晃	28 年検挙 (3・15)
阿部 勇	38 年検挙 (人民戦線)
安部 磯雄	38 年右翼による襲撃
荒畑 寒村	26 年下獄, 28 年検挙, 37 年検挙 (人民戦線) (本名: 勝三)

有沢 広巳	38年検挙, 東大休職 (人民戦線)
井汲 卓一	30年検挙, 33年検挙, 37年再入獄
石浜 知行	28年九大免職
伊豆 公夫	26年検挙, 33年検挙, 38年検挙 (唯物論研究会) (本名: 赤羽寿)
伊藤 好道	37年検挙 (人民戦線)
稲岡 進	29年検挙, 35年禁錮
稲村 順三	37年検挙 (人民戦線) (本名: 順蔵)
井上 満	32年検挙 (10・30)
猪俣津南雄	26年下獄, 37年検挙 (人民戦線), 42年入院執行停止後病死
今中 次麿	42年九大辞任
岩田 義道	26年検挙 (京都学連), 28年検挙 (3・15), 32年検挙獄中拷問死
上田 茂樹	25年検挙 (第1次共産党), 28年検挙 (3・15), 32年検挙, 獄中で消息不明
宇野 弘蔵	38年検挙, 東北大休職 (労農教授グループ)
大内 兵衛	38年検挙, 東大休職 (人民戦線)
大川 権三	(本名: 鍋山貞親)
大塚金之助	33年検挙, 東京商科大休職
大橋 積	25年検挙 (京都学連)
大森義太郎	28年東大辞職, 37年検挙 (人民戦線), 40年保釈後病死
大山 郁夫	27年早大辞職
岡 邦雄	31年検挙, 32年一高辞職, 38年検挙 (唯物論研究会), 44年下獄
岡田 宗司	37年検挙 (人民戦線)
賀川 豊彦	40年憲兵隊に拘引, 43年留置
風早八十二	28年九大辞職 (3・15), 33年検挙, 40年検挙
門屋 博	28年検挙 (3・15)
上村 正夫	26年検挙 (京都学連)
河合栄治郎	39年東大休職 (本名: 栄次郎)
川内 唯彦	34年検挙
河上 肇	28年京大辞職, 33年検挙
草野 幸一	30年検挙 (本名: 西山武一)
久保 譲	35年検挙 (無産者共産党)
蔵原 惟人	32年検挙
栗原 佑	26年検挙 (京都学連), 28年検挙, 32年検挙, 41年検挙
小岩井 浄	26年下獄 (第1次共産党), 31年検挙, 獄中で大阪府議当選, 37年検挙
小林 輝次	26年法大を追放, 29年検挙 (4・16), 40年検挙
小林 良正	30年検挙 (党シンパ), 36年検挙 (コム・アカデミー)

円本と人権

近藤 栄蔵	42 年検挙
堺 利彦	26 年下獄
向坂 逸郎	28 年九大追放, 37 年検挙 (人民戦線)
佐々 弘雄	28 年九大追放
佐野 文夫	28 年検挙 (3・15), 30 年保釈後死去
佐野 学	26 年下獄 (第 1 次共産党), 29 年検挙
杉之原舜一	28 年九大休職, 32 年検挙
鈴木茂三郎	37 年検挙 (人民戦線)
住谷 悦治	27 年検挙, 33 年同志社大退職, 42 年松山高商退職
関根 悦郎	28 年検挙 (3・15), 38 年検挙 (京浜グループ)
外村 史郎	41 年東京外語大退職処分 (本名: 馬場哲哉)
高田 博厚	28 年検束
高津 正道	27 年入獄, 36 年検挙 (人民戦線)
高橋 正雄	38 年検挙, 九大休職 (人民戦線)
高山 洋吉	30 年検挙, 32 年検挙
滝川 幸辰	33 年京大休職
田中 九一	43 年検挙 (満鉄調査部)
玉城 肇	41 年検挙 (企画院事件)
淡 徳三郎	26 年検挙 (京都学連), 28 年検挙 (3・15)
塚本 三吉	28 年九大追放, 29 年検挙
戸坂 潤	31 年検挙, 38 年検挙 (唯物論研究会), 45 年獄死
直井 武夫	28 年検挙 (3・15), 41 年検挙 (企画院)
中野 重治	28 年検挙 (3・15), 30 年検挙, 32 年検挙, 41 年検挙
鍋山 貞親	26 年検挙, 29 年検挙
西 雅雄	26 年下獄, 28 年検挙 (3・15), 42 年検挙 (満鉄調査部), 44 年獄死
野坂 鉄	26 年入獄, 28 年検挙 (3・15) (本名: 参三)
延島 英一	25 年検挙
野村 襄二	29 年検挙 (4・16) (本名: 三田村四郎)
野呂榮太郎	25 年検束, 26 年検挙 (京都学連), 29 年検挙 (4・16), 33 年検挙, 34 年留置中死亡
服部英太郎	42 年東北大追放, 42 年検挙
服部 之總	28 年検挙 (3・15), 38 年検挙 (唯物論研究会)
服部 実	29 年宇都宮高等農村学校解雇
羽仁 五郎	33 年検挙, 45 年検挙
林 要	36 年同志社大追放
林 房雄	26 年検挙 (京都学連), 30 年検挙 (共産党シンパ), 34 年下獄 (本名: 後藤寿夫)

平野義太郎	30年検挙（共産党シンパ）、東大罷免、36年検挙（コム・アカデミー）
広島 定吉	40年検挙（唯物論研究会）
藤森 成吉	32年検挙
布施 辰治	32年弁護士資格剥奪、33年下獄、検挙、39年下獄
細川 嘉六	26年検挙、33年検挙（共産党シンパ）、42年検挙（横浜）
馬島 圃	34年検挙
松本 篤一	26年検挙（京都学連）
丸目 秋一	29年検挙（4・16）
丸山 一郎	（本名：風早八十二）
水谷長三郎	28年検挙（3・15）
美濃部達吉	35年告訴、議員辞職、36年右翼による狙撃
美濃部亮吉	38年検挙（人民戦線）、法大辞任
三宅 正一	26年検挙
宮崎 龍介	37年検挙
村山藤四郎	28年検挙（3・15）
森口 繁治	33年京大辞任（滝川）
八木澤善次	41年検挙（企画院）
山川 均	37年検挙（人民戦線）
山口 信治	33年検挙
山下 徳治	30年起訴
山田清三郎	31年検挙、34年下獄
山田盛太郎	30年検挙、東大辞職（共産党シンパ事件）、36年検挙（コム・アカデミー）
山本 宣治	25年京大、同志社大追放（学連事件）、29年右翼による刺殺
鰐山 政道	39年東大辞任
和田 徹三	（本名：村山藤四郎）
渡邊 鎮蔵	27年東大辞職、44年検挙

一方で、1930年後半以降に弾圧された執筆者については、それ以前には政治に関わっていなかったり、転向や体制への迎合の経験をし、さらには体制の積極的支持者になって共産党関連者への弾圧に対しては黙殺や支持さえしていた人々もいる。

「治安維持法が制定された1925年から廃止されるまでの20年間に、逮捕者数十万人、送検された人75681人、虐殺された人90人以上、拷問、虐待

などによる獄死 1600 人余，実刑 5162 人に上っている」⁽⁴⁴⁾とされるが，政治犯や政治的弾圧の犠牲者のわかりやすいデータベースは存在していない。このような「政治犯のリスト」，もしくは「弾圧犠牲者のデータベース」は，人権抑圧の基礎資料となるだけでなく，記憶と追悼，そして反省の礎となるものとして，本来，国家の責任として，国民の責任として取り組むべきプロジェクトであり，様々な時代について様々な国において作成されてはいるが⁽⁴⁵⁾，わが国ではあまり重視されているとは思えない。

治安維持法下を中心にした弾圧の犠牲者については，終戦直後に出版された森正蔵『風雪の碑』（1946 年 3 月）⁽⁴⁶⁾が出版されている。それは，当時の解放感あふれる視点で，戦争中には報道が禁じられてきた事実を記者たちのチームによってまとめ，犠牲者の歴史を描くことで衝撃を与えた。その直前に出版された『旋風二十年』⁽⁴⁷⁾に引き続きベストセラーになったが，しばらく経つと，米軍に禁じられたとされる。そこに掲載された活動家の戦後の歩みを若干書き添えた改訂版は 1971 年にでる。また向坂逸郎編著『嵐のなかの百年——学問弾圧小史』（1952 年）⁽⁴⁸⁾は，学者への弾圧に的を絞って編集されている。しかし，両者とも各事件について時代をおって説明する内容で，犠牲者の全貌はつかみにくい。一方，米原昶，風早八十二，塩田庄兵衛，「特高警察黒書」編集委員会編『特高警察黒書』（新日本出版社，1977 年）には，犠牲者のリストも掲載されている⁽⁴⁹⁾。戦前の司法関連の資料の復刻がなされていき，みすず書房の『現代史資料』や第一法規の『日本政治裁判史録』のシリーズなど個々の事件についての資料が発行されたが，全体の犠牲者のリストやデータベースは，不完全のままである。

最近，治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟から治安維持法の犠牲者のリストが刊行されたが⁽⁵⁰⁾，十分とは言えない。また青山霊園の「解放運動無名戦士墓」をはじめ各地の解放運動の犠牲者の墓や碑に合葬された人々のリストも存在するが⁽⁵¹⁾，これらは「解放運動に寄与した人々」についてのもの

であり、必ずしも治安維持法下の犠牲者のリストとはならない。

ここでは、直接的な人権侵害である逮捕や拘留、そして大学からの追放を取り上げたが、一般的に治安維持法による知識人の弾圧の定義は難しく、アプローチもしづらい。獄死、拷問、長期拘禁、逮捕だけでなく、病死、発禁・検閲、さらには自主検閲・沈黙、転向まで言論の自由の侵害に関連している。たとえば、1926年の『社会問題講座』の時点では、次のように示される。

京都の学生検挙事件は、先月中旬、漸く記事差止解禁となった。(中略) 該事件に連座した、淡，岩田，野呂の三講師の担当課目に就て，会員諸氏より頻々たる問合せがあるが，三氏共に目下保釈出獄中であり，至って健在，本講座の原稿を執筆しつつあるとの事なれば，来号より順次掲載し得ると思う。／共産党事件に座せる猪俣，野阪の両氏に就ても同様の御訊ねであるが，終巻迄には必ず全責任を果すとの事である⁽⁵²⁾。

このように、治安維持法の初期の頃は、反体制側の言論の活気も十分にあったし、体制側の残虐さにも一定の歯止めがかかっていた。しかし少し時代が後になる『日本資本主義発達講座』では、編集責任者の野呂栄太郎が、1932年の「共産党の検挙と岩田義道の死にともなって」、非合法活動を強いられ執筆がままならず、その後「獄死」したことは有名な話であるが、その他、当初執筆予定とされていた寺島一夫、平田良衛、野村二郎（小椋広勝）が、1932年3～6月の「プロレタリア科学研究所」の弾圧により逮捕され、執筆者が交代した⁽⁵³⁾ ことにみられるように、執筆者の検挙以外にも、多くの潜在的な執筆者への弾圧があった。

最後に、治安維持法による弾圧のメカニズムをデモクラシー論や人権論から考えてみる。治安維持法においては、「国体変革」と「私有財産制度否認」の条項をブラックホールのように拡大しながら、社会運動家について体制変

革を目指すテロリストであるかのように排除し、死刑条項も追加していく。その一方で「留保処分」を加えることで「思想善導」などを通じた転向への道を広げていった⁽⁶⁴⁾。

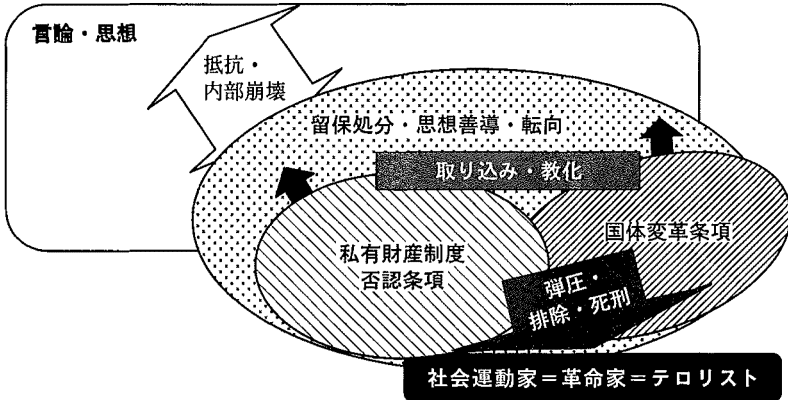


図3 治安維持法のメカニズム

ここでは、治安維持法のメカニズムについて、デモクラシーと人権の関連から考察してみよう。私は以前、デモクラシーと人権が手を携えるべきであるにもかかわらず、「みんなの決定だから」とするデモクラシーと「みんなの決定であっても」という人権は、本質的に対立の契機を含むことを示した(図4)⁽⁵⁵⁾。

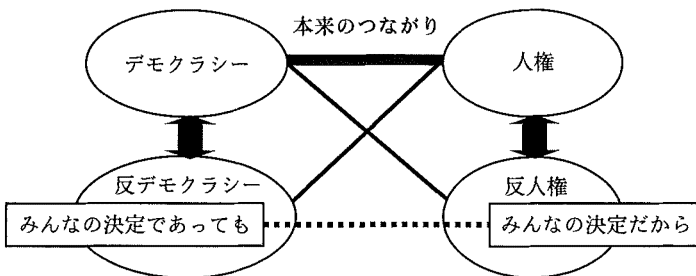


図4 デモクラシーと人権の関係

この図式を治安維持法にあてはめると、デモクラシーと人権が十分に連関して意識されていない状況のもと、「普通選挙の導入（デモクラシーの拡大）」が、混乱への不安を醸成し、それが秩序（治安）への欲求となる。一方、社会運動や革命運動側が、既存の政党政治・議会政治への批判を強めるにつれて、政治制度への不信が高まり、それが治安への不安に結びつくことで、独裁が正当化されていくことになる。

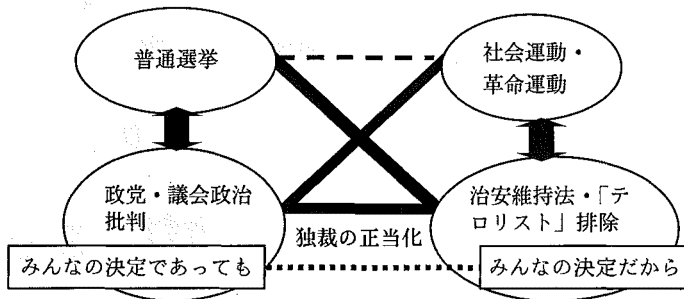


図5 「デモクラシーと人権の関係」と独裁の正当化

よく言われるところの普通選挙と治安維持法との抱き合わせ的な施行については、単にアメとムチであるとか、権利と義務の関連の過度の強調という側面だけでなく、デモクラシーと人権の本質的な対立からみることもできる。普通選挙の実施は、まさにデモクラシーの拡大であるが、個人の自由よりも集団の秩序を優先する面がある。すなわち平等の拡大に伴う不安感によって、自由の剥奪が正当化される⁽⁵⁶⁾。前稿でも述べたが⁽⁵⁷⁾、革命家＝テロリストとして、社会運動家を排除しているメカニズムは、「みんな」による決定の仕組みであるデモクラシー自体に内在している排除の論理と両立しうる⁽⁵⁸⁾。

また、反体制運動側において人権という用語が普遍的に使われてこなかったことにも注意しなければならない。権利が人権というよりは、既存秩序を支えている所有権と強く結びついていたことで、私有財産を否認するマルクス主義や社会主義、さらにはトルストイ主義者などによる所有権に対する批

判が、権利への不信となって人権の軽視に至ることになる。

日本評論社の『現代法学全集』の「治安維持法」関連の部分では、第30巻（1930年）の風早八十二の担当論文が発禁になって、その部分が切り取られたものが許可販売されたのはよく指摘される話だが、それに代わるものとして、第38巻（1931年）で治安維持法策定の中心であった大審院判事で、戦後には公職追放になった三宅正太郎の論文が掲載されている。そこでは次のように結論されている。

實際斯の如き広汎な且捕捉すべからざる内容を有し重大な結果を持つ法律は、我國に在っては其例に乏しい。従って執法者がもし他の法律を解釈適用すると同一態度を以て本法に臨み、精神の在るところを究めないで徒に辞句の解釈に走り厳格に之を適用するに於ては、本法は極めて苛酷不自然な法となつて、その本来の使命を遠く逸脱する結果を齎らすものである。（中略）／而も伝統に対する信念の一般に極めて固い我國に於ては自己の行為に対する弁明に自由を得ない場合が必しも稀でなく、被告人は甚しく不利益の地位に陥らざるを得ない。即一朝本法の運用を誤れば甚しく社会を脅威するものであつて、著しく社会の進運を阻止する危険があるのである。／第三に本法の犯罪者中にはその犯情において同情すべきものを見ることが稀でない⁽⁵⁹⁾。

さらに三宅は、「私有財産制度」は「欧州に於ては十九世紀以降の所産であり、我國に於ては明治以降の所産である」として、「現在の社会制度の欠陥はあまりにも明白に吾人の眼前に展開されて」いて、「此欠陥の犠牲になった者が、より良き社会への希望を抱くに何の不思議もないのであつて偶々その踏むところを過つて本法の犯罪者となつたとしても、一步現代を離れて彼を見るとき、何人もよく彼を裁き得ないであらう」とした⁽⁶⁰⁾。荻野富士夫

は、三宅のこのような見解について、「司法部内ではごくわずかにすぎず、思想検事にひっぱられて、判事も司法による思想犯罪の封殺に狂奔するのである」⁽⁶¹⁾とする。しかし、このような私有財産制度に対する批判的見解への同情は、当時の体制批判的気運を含んでいるとは言えるが、欧米型資本主義を批判するファシズムやアジア主義にも簡単に吸引されてしまう感慨であり、円本時代のせめぎ合う言論のその後の行方をよく表わしているといえる。

《注》

- (1) 拙稿「1930年の出版、神保町、そして人権」『政経論叢』明治大学政治経済研究所、第83巻、第5・6号、2015年3月。
- (2) 独裁の正当化については、拙稿「人権批判の構造」『政経論叢』明治大学政治経済研究所、第80巻、第5・6号、2012年3月、62ページを参照のこと。
- (3) たとえばドストエフスキーの『死の家の記録』、チェーホフの『サハリン島』、トルストイの『復活』、そしてソルジェニツィンの『収容所群島』を参照のこと。「堪えがたい生活が始まり、ドストエフスキーやチェーホフの時代のように囚人をもはや《不幸せな人》とは呼ばなくなり、呼ぶとしたら、《畜生め》ぐらいのものだろう。1938年にはマガダン市の学生たちが、連行される女囚たちの隊列を目掛けて、石を投げたのであった（スロフツェワの思い出）。」(ソルジェニツィン(木村浩訳)『収容所群島 1918-1956 文学的考察』4、新潮文庫、1976年、445ページ)。
- (4) 拙稿「転向論」『政経論叢』明治大学政治経済研究所、第82巻、第5・6号、2014年3月参照。
- (5) 日本近代文学館、小田切進『日本近代文学大事典』第4巻、講談社、17-18ページ。
- (6) 「改造社版 マルクスエンゲルス全集月報第二号昭和三年十月 第三回配本付録」32ページ。なお、実際の『経済学全集』は63巻(及び別巻)で完結した。
- (7) 永嶺重敏「円本の誕生と「普選国民」」(吉見俊哉、土屋礼子編『大衆文化とメディア』叢書現代のメディアとジャーナリズム、第4巻、2010年所収)、4ページ。また橋本求は「大正十五年円本全集の出現が、出版業界にどんな旋風をまきおこしたかを知るために、ここには、対照の意味でその前年の十四年から、昭和四年までの五年間に現われた全集もの(講座、叢書、長巻ものを含む)

を大観してみよう。もちろんいわゆる円本の仲間に入るものばかりではないが、ともかくもこの五年間に企画発行されたシリーズものは三百数十種にのぼっていることがわかる」として、以下、書名、巻数、発行所、定価の表を長々と示している（橋本求『日本出版販売史』講談社、1964年、366-376ページ）。

また内務省警保局の『出版警察概観』には「思想関係の全集物、叢書類は昭和4年中に於て大小併せて41種の刊行があり、従来の文芸物全盛より一転して思想物全盛への方向転換をなしたるやの観があったが5年1月の日本評論社の「日本プロレタリア傑作選集」が出版され大成功を収むるや俄然斯種プロレタリア文芸叢書の大流行を現出した」として昭和5年に新たに発行された45種の左翼的な全集叢書類を列举している（内務省警保局編『出版警察概観 昭和五・六年』復刻版、龍溪舎、1981年、80-83ページ）。

- (8) 前掲「円本の誕生と「普選国民」」5-8ページ。全集については、日外アソシエーツ編『全集・叢書総目録 明治・大正・昭和戦前期 I 総記・人文・社会』紀伊國屋書店、2007年。書誌研究懇話会編『全集叢書総覧 新訂版』八木書店、1983年。また、前掲『日本出版販売史』参照。
- (9) たとえば、『社会問題講座』では、新潮社営業部は、希望者には配本された全13巻を、部門ごとに分類し直したうえで、合本用特製表紙にて、本文4冊と科外講話・雑録等の1冊に製本し直すための広告を載せ、「各講の分類に容易ならざる手数を要するので」六円七十七銭の料金は「犠牲的奉仕」とであるとしている（「社会問題講座合本用特製「表紙」提供」『社会問題講座』第13巻、新潮社、1927年、雑録15ページ）。また日本評論社の『社会経済体系』では、最終巻のあと書きに「各科目別による製本は、本社に於て実費にてお引受けすることを予約しましたが、諸賢より御送付の仮綴本を、各科目別に整理して再製本するには、仮綴本をほぐす工程と、再製本する工程とを、大部数同時にせねばならぬ関係上、その際に甲者と乙者との内容を混淆する惧れが多分にあるために、製本を断る旨が記されている（「読者諸賢に謹告」『社会経済体系』第17編、日本評論社、1928年、470ページ）。実際、明治大学図書館所蔵の『社会問題講座』は部門ごとに製本し直されており、そこでの「第13巻」は全巻の「雑録」だけをまとめたものとなっているが、順序も内容も正しいものではなくなっている。
- (10) 美作太郎『戦前戦中を歩む 編集者として』日本評論社、1985年、230-231ページ。
- (11) 新潮社の『社会問題講座』については若き大宅壮一の活躍が有名であるが、「約五万部を増刷。円本以前の予約出版の新記録をつくる。完結後、合本用特製表紙をつくり希望者に頒布。なお、新潮社は欧米の学界、知名人、図書館等

への本書全巻を寄贈し、米作家 A・シンクレア、ウェッブ英商相、マクドナルド英労働党主、ソビエトのマルクス・エンゲルス協会など各国から多数の感謝状が寄せられる」とされ（紀田順一郎監修『新潮社 100 年図書総目録』新潮社、1996 年、129-130 ページ）、また「当時の社会運動家たちを広く執筆陣に集めて、社会問題と社会思想の概要を示す試みとしては、最初のものであったし、各巻の巻頭に掲げられた産労の編集にかかるわが国の現勢を示す各図表は注目すべき啓蒙的意義をもっており、1920 年代後半の青年インテリゲンチヤの読書欲を集中させたし、その後の講座ものの先駆でもあった」（松島栄一「日本におけるマルキシズムの展開——「日本資本主義」「明治維新」研究と社会科学の確立——」（内田義彦、大塚久雄、松島栄一編『マルキシズム Ⅰ』現代日本思想体系 20、筑摩書房、1966 年所収）、14 ページ）とされる。

- (12) 青野季吉「社会問題に関する本年の出版」（中泉春男編『出版年鑑 1927』国際思潮研究会版、1926 年所収）、第一篇「大正十五年の出版物概評」2-3 ページ。
- (13) 前掲「円本の誕生と「普選国民」」10 ページ。
- (14) 同上、12 ページ。
- (15) 「編輯部より」『社会問題講座』第 9 巻、新潮社、1926 年、雑録 20 ページ。
- (16) 島中雄三（前掲『出版年鑑 1927』所収）、第三篇「大正十五年度出版界所感」、6 ページ。
- (17) 岩波茂雄「大正十五年度出版界所感」同上、2 ページ。
- (18) 前掲「円本の誕生と「普選国民」」13 ページ。
- (19) 同上、15 ページ。
- (20) 松本正雄「円本時代と左翼出版」（同編『ドキュメント昭和五十年史 1 大正から昭和へ』汐文社、1974 年所収）、240 ページ。
- (21) 前掲『戦前戦中を歩む』228-229 ページ。
- (22) 前掲「円本時代と左翼出版」243-247 ページ。
- (23) 前掲「円本の誕生と「普選国民」」3-4、27 ページ。
- (24) 紅野謙介『検閲と文学 1920 年代の攻防』河出書房新社、2009 年、167 ページ。
- (25) 円本と木村毅の関わりについては、塩澤実信『昭和ベストセラー世相史』第三文明社、1988 年、7-11 ページ。
- (26) 木村毅『私の文学回顧録』青蛙房、1979 年、369 ページ。
- (27) 大澤聡『批評メディア論 戦前期日本の論壇と文壇』岩波書店、2015 年、33 ページ。
- (28) 同上、48 ページ。

- (29) 同上, 51 ページ。
- (30) 小川菊松『出版興亡五十年』誠文堂新光社, 1953 年, 138-140 ページ。
- (31) 小田光男『書物の近代 本が輝いていた時代』平凡社, 2003 年, 96 ページ。
- (32) 宮武外骨『一圓本流行の害毒と其裏面談』有限社, 1928 年。
- (33) 前掲『日本出版販売史』353 ページ (「出版物販売業の発展を語る座談会」における元東京堂社長大野孫平の談)。
- (34) 『報知新聞』1928 年 5 月 25 日 (入江徳郎他編『新聞集成 昭和史の証言』第二巻——思想弾圧・初の普選, 1983 年, 本邦書籍社, 184 ページを参照した)。
- (35) 永嶺重敏『円本ブームと読者』(青木保ほか編『大衆文化とマスメディア』近代日本文化論第 7 巻, 岩波書店 1999 年所収), 202 ページ。
- (36) 同上, 202 ページ。
- (37) 前掲『出版興亡五十年』, 142 ページ。
- (38) 梅田俊英『社会運動と出版文化——近代日本における知的共同体の形成』御茶の水書房, 1998 年, 5 ページ。
- (39) リチャード・ベッセル「はじめに——問題の所在——」(同編(柴田敬二訳)『ナチ統治下の民衆』刀水書房, 1990 年所収), 13-14 ページ。
- (40) 前掲『1930 年の出版, 神保町, そして人権』15-23 ページ。
- (41) これらの表は, 主に, 塩田庄兵衛ほか編『日本社会運動人名辞典』青木書店, 1979 年, 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会編『近代日本社会運動史人物大事典』1~5, 日外アソシエーツ, 1997 年, 日本アナキズム運動人名事典編集委員会編『日本アナキズム運動人名事典』ばる出版, 2004 年, 秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』第 2 版, 東京大学出版会, 2013 年, 近代人物研究会編『近代人物号筆名辞典』柏書房, 1979 年などを参考にした。
- (42) よく指摘されるように, 「検挙」という言葉は曖昧で幅広い意味で使われるので, ここでは逮捕も含めた概念とした。その意味でも, 実際に検挙された人の範囲はさらに広いことが予想される。また治安維持法による検挙の理由は, 主として組織的な政治活動や社会活動であるので, 執筆活動と検挙が直接結びついているわけではないが, 政治犯の存在は, 人権状況を評価する際の最も基本的な要素といえる。
- (43) 前掲『私の文学回顧録』328 ページ。
- (44) 「治安維持法犠牲者に対する国家賠償法の制定に関する請願」第 180 回国会「請願の要旨」(新件番号 1035), 参議院の請願の HP (<http://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/seigan/180/yousi/yo1801035.htm>) (アクセス日 2015 年 12 月 3 日)。
- (45) たとえば, ソ連末期の政治犯リストは, 当時の旧西ドイツで Cronid

Lyubarsky ed., *List of Political Prisoners in the USSR* が毎年刊行され速報も毎月出され、当時の人権状況についての基礎資料となっていた（拙稿「ソ連異論派研究序説」『明治大学大学院紀要』政治経済学篇，第22巻，1985年2月参照，235ページ）。ソ連のスターリン時代の膨大な数の犠牲者データベース〈<http://lists.memo.ru/index.htm>〉を作成している人権団体「メモリアル」では現在のロシアの政治犯リスト〈<http://memohrc.org/pzk-list>〉が公表されている。現在の中国の政治犯データベースは，the Congressional-Executive Commission on China's Political Prisoner Database 〈<http://ppdcecc.gov>〉を参照のこと。またホロコーストでユダヤ人の犠牲者のデータベースについては，ヤド・ヴァシェム（イスラエルの国立ホロコースト記念館）の The Central Database of Shoah Victims' Names 〈<http://db.yad.vashem.org/names/search.html?language=en>〉。

- (46) 森正蔵『風雪の碑』鯉書房，1946年（同，尾崎秀樹解説『風雪の碑 人物・日本社会主義運動史』鯉書房，1971年）。
- (47) 森正蔵『旋風二十年』鯉書房，1945年。これについては，「書物に飢え，謬ったお上の情報操作に怒っていた一般国民は，ワット書店に押しかけ，初版十万部は一週間足らずで売り切れてしまった。闇ルートで用紙を手に入れ，重版につぐ重版で，翌年春，百八十九頁，定価九円八十銭で上梓された下巻とともに，公称八十万部を超える大ベストセラーとなったのである」とされる（前掲『昭和とベストセラー世相史』，102ページ）。
- (48) 向坂逸郎編著『嵐のなかの百年——学問弾圧小史』勁草書房，1952年。
- (49) 米原昶，風早八十二，塩田庄兵衛，「特高警察黒書」編集委員会編『特高警察黒書』新日本出版社，1977年，145-152ページ。
- (50) 治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟『虐殺——国家権力の犯罪 治安維持法体制下の弾圧(Ⅰ)』治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟，2011年，同『獄死者——国家権力の犯罪 治安維持法体制下の弾圧(Ⅱ)』治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟，2014年（補訂版2015年）。
- (51) たとえば「解放のいしずえ」刊行委員会編『解放のいしずえ』解放運動犠牲者合葬追悼会世話人会，1956年には，約2300名の「解放運動の犠牲者」の名簿と略伝が掲載されている。なお，この合葬追悼会の経緯については岡村親宜『無名戦士の墓 評伝・弁護士大森詮夫の生涯とその仲間たち』学習の友社，1997年，230-260ページを参照のこと。
- (52) 「編輯部より」『社会問題講座』第8巻，新潮社，1926年10月，22ページ。
- (53) 大石嘉一郎『日本資本主義発達史講座』刊行事情『日本資本主義発達史講座刊行五十周年記念復刻版，別冊1 解説・資料』岩波書店，1982年，39-40

ページ。

- (54) 治安維持法については、奥平康弘『治安維持法小史』岩波書店、2006年、潮見俊隆『治安維持法』岩波書店、1977年、森正『治安維持法裁判と弁護士』日本評論社、1985年、上田誠吉『昭和裁判史論：治安維持法と法律家たち』大月書店、1983年等を参照した。
- (55) 前掲「人権批判の構造」60-61ページ。
- (56) 18歳への選挙権の拡大についても、新たな政治参加に対する不安が秩序への要求に向かうと、簡単に人権侵害を正当化する雰囲気生まれるので、特に注意を払う必要がある。
- (57) 前掲「1930年の出版、神保町、そして人権」24ページ。
- (58) 権力側にとって都合の悪い人物は、たとえば江戸時代には大塩平八郎、明治大正期には、幸徳秋水との関係がフレームアップされた（大久保利謙「洋学の迫害」（前掲『嵐のなかの百年』所収）、30ページ、同「ゆがめられた歴史」同61ページ）。
- (59) 三宅正太郎「治安維持法」『現代法学全集』第38巻、日本評論社、1931年、222-3ページ。
- (60) 同上、223ページ。
- (61) 萩野富士夫『思想検事』岩波書店、2000年、51ページ。